

「引っ込み思案の子」にさせない7つのポイント

「はじめて体験することに消極的な子が多くなっていると、強く感じる」

「新しいことをする前から泣き出してやらなかったり、『やってみよう』と声をかけても『ムリ!』と即答する子が増えている」

これらは、全国のベテランの幼稚園、保育園の先生方の声です。また、色々な教育会議の席で先生方にお話しを聞いても、どこでも「失敗を恐れる子、消極的な子が多くなった」と言われます。これは一体どういうことなのでしょう。

保護者の皆様も子育ての参考にさせていただければと教育学者、汐見先生の書籍を参考に「引っ込み思案の子」にさせない7つのポイントについて書かせていただきます。

幼稚園の3~6歳の子どもというのは、本来、何にでも興味深々で、「ダメ」と止めてもやりたがる、そんな年齢のはずです。しかし近年、そういった子どもたちが減り、新しいことにあまりチャレンジをしない、「リスク回避型」の子どもたちが増えているというのです。

少し考えればわかりますが、こうした消極的な子どもが増えている背景には、3歳以前の、つまり0~2歳の子育てが大きく影響しています。ここでは、わが子をそうした消極的なタイプにしないための大切な原則を7つに分けて説明させていただきます。

原則① 子どもが自由にできる空間を作る

この年齢の子どもは、目に見える範囲のものすべてに興味をもって、「これ何だろう?」とさわったりいじったりする「探索活動」を行います。それを通じてさまざまなことを学んでいくのです。ですから、子どもに危険がないよう配慮しながら、可能な限り、子どもにものなどを自由にいじらせる空間を作ってみてください。それがお子様の積極性・意欲を育てていきます。

原則② いたずらや危険な行動を頭ごなしに否定しない

「それをしちゃあダメでしょ!」「危ないからやめて!」などと頭ごなしに言わない、ということです。でも、「実際にはよく言ってしまう」というお母さん

は多いのではないのでしょうか。子どもが起こした行動に対して条件反射のように「ダメ」と注意する、そんなお母さんがいるかもしれません。けれども、この年齢の子どもは、どういうことがやってよいことで、どういうことはダメなのか、まだわからないのです。だから頭ごなしに注意されると、まるで自分のすべてを否定されたような気持ちになり、心に小さな傷を残してしまいます。知らないうちにお子様の心が物事に対して萎縮しないように注意して下さい。

原則③ 子どもの個性を親として引き受ける

よく日本人は「個性がない」と言われますが、そんなことはありません。生まれたその瞬間から、どの子にも個性はあります。泣き方 1 つとってみても同じではないように、それぞれ個人差があります。これが子どもの個性のもと、個性の芽なのです。お子様の個性を親として引き受けて下さい。

原則④ 大変なイヤイヤ期こそ、子どものプライドを尊重したい

2歳前後になると、たいていの子は何にでも反抗するようになります。英語では「terrible two (恐るべき2歳児)」と呼ばれるくらい、とにかく接し方が難しい時期です。

この時期ばかりは、お母さんも思わず怒鳴ってしまうことも多くなるでしょう。でも、ここで気をつけていただきたい事は、お子様の「自尊心、つまりプライドを傷つけないで」ということです。

原則⑤ 世界と具体的に出会わせる

この時期には、世界と具体的に出会わせてください。できればお決まりの散歩コースを作り、そこを一緒に歩くことです。そのなかで、春には花が咲き、冬には枯れてしまう、温かいところや寒いところがあるなどを肌で感じる。また、虫がいたらそれに興味を持つなど、いろいろ感じることはあるはずです。その多様な体験により、子どもは自分が生れた世界についてのイメージを少しずつ作り上げていくのです。

そのイメージを作り上げるには 2 つの要素が必要です。1 つは上の例の様に「自然とどう出会うか」ということです。

もう 1 つは、「人間 (社会) とどう出会うか」ということです。親との出会いが一番大事な出会いで、できるだけ温かく、愛情を持って接する。そうするこ

とにより、「自分は深く愛されているんだな」という大きな安心感と、人への信頼感を育むことになります。

「世界というのは安心できるし、興味深いことがいっぱいあるんだな」という土台を作るのが3歳までの時期になります。ちなみに、この3歳までの時期に虫にさわったことのない子は、大人になっても虫が苦手になる可能性大ですので気をつけてください。

原則⑥ 子どもは自分で自分を発達させる。「見守る育児」を大事に！

子どもは「10」の力があるとすると、「11」や「12」の力が必要なことには指示もされないのに挑んでいきます。今、自分ができることよりもちょっとむずかしいことに、どんどん自分から挑んでいくのです。でも「13」「14」の力が必要なことには挑みません。不思議なものです。その結果、適切な環境さえあれば子どもは自分の力でどんどん発達していきます。この面から見ると、大人のやるべきことは、「子どもの自発的挑戦」＝「発達」を邪魔しないことです。注意して下さい。

原則⑦ きょうだいが生まれる場合、上の子どもより濃密な時間を持つ

補足的なお話になりますが、弟や妹が生まれたとき、場合によっては上の子が赤ちゃん返りしたり、赤ちゃんに対して攻撃的になったりします。これは「お母さんの愛情を奪われてしまうのではないか」という子どもなりの危機感からくるものです。ですから、お母さんは上の子どもに時間を決めて、より濃密に接し、「大丈夫だよ。安心してね」と、納得させてあげてください。子どもはお母さんの愛情をいつでも感じていたいものなのです。

最後にもう一つお願いしたいこと。それは「お母さんたちは育児で高まったストレスをうまく発散させてください」ということです。できればワイワイガヤガヤできる「ストレス発散の場」を持って下さい。お母さんの自由こそ、お子様の自由となるのです。

理事長